



考



第四十二回『初恋にさようなら』と新しい愛国教育

あっさり自己肯定できるほど、
ストレートな人生じゃねえよ。

弦楽器イルカ  ⇔ 友人

第四十二回 『初恋にさようなら』と新しい愛国教育～G から U へ～

久しぶりだけど元気？今回、まずは当たり障りない最近の話題からね。

今年に入ってから、PCにSTEAMってプラットフォームを無料インストールして（知ってる？）、地味で変わった洋ゲーを少しずつやってる。最新の『バイオハザード』や『MGS』とかもできるんだけど、高いし買ってない。

それより、気が滅入る版『アウター・ワールド』みたいな『LIMBO』とか『INSIDE』って、お勧めはまったくしないけど、単なるゲームというよりはゲームを通して何かを表現しようとする「ゲーム表現」って新しいジャンルだと俺は思う。

『Brothers』って洋ゲーも、やらされ感の少ない『ぼくのなつやすみ』っぼくていい。和ゲーだとどうしても、虫獲りや魚釣りって単なる子供の遊びでさえも「何センチ勝った負けた」って、わかりやすいゲーム性に落ち着けちゃう生真面目さがある。

そこ洋ゲーだと、草花いじってる庭師の尻を叩いて笑うためだけにアクションボタン押すとか、犬に追いたてられるいじめっ子を冷かして笑うためだけにアクションボタン押すとかの、発想が自由で爽快。

モニターの中のキャラクターが自在に動くってシンプルな意外さは、まだまだ無限の面白さを持つと思った。

『STYX』ってステルス・ゲームも正統派で面白いんだけど（これ前にクリアしたPS2の『セイソツ』によく似てる）、ゲームを通して新しい表現を体験したいと最近には富に思うね。

ここ一応、枕になってます。

今回は、これまでの四十二回をウマシカ表現でカラッとまとめます。

まず最近のネトウハ▽学園騒動について結論から書くけど、愛国は金になる。票になる。為政者にとっては求心力になる。

この国の目立った新興宗教のいくつかも、右寄りのスタンスを公表してる。なぜか。権力者が民衆をコントロールする手法として、「御国のために散れ」「神のために捧げろ」って思考停止が最も都合いいからだろう。極論すれば権力者は、私腹を肥やし信者をコントロールできるなら、右でも左でもどっちでもいんだらうと思う。

こっからウマシカ表現を多用するけど、小島国の愛国と、半島国や大陸国の愛国をうまく対立させてコントロールできれば、それだけで互いの国の為政者は権力を維持できる。実際、ここ数年の愛国活動のおかげで、隣国に悪感情を抱く小島国民が増えている。結局どっちの国の愛国も、実は同じ中ウハ▽組織が仕切ってるって噂も、ネットではよく見る話だ。

もちろんこの愛国利権ビジネスには、様々な組織や宗教がのっかってる。巻ウハ▽も、自分の正しさを得るために、知ってか知らずか喜んで巻き込まれてる。だからネトウハ▽の調子がいい時はみんなで一致団結して、右回りで国を動かす。

ただネトウハ▽の調子が悪くなると、今回みたいにダメなスイミーたちの共喰いが始まる。

だけど俺が書きたいのはそこじゃない。コネや利権や仲間割れなんて売春より昔からあるはずだ。タダで土地転がしてる案件も、単に氷山の一角だろう。

それよりもネトウハ▽の中に、「国民主権」「平和主義」「基本的人権の尊重」をマジで廃止しようとする動きがある方が重いと俺は思う。

愛国をコントロールして俺ら愚民どもの命を削り、自分たちはワイングラス片手にその削り節を軽くつまもうって類の権力者がワンサカいる。

今回のネトウハ▽学園騒動で、そういう国粋主義的な動きにブレーキがかかるのなら、俺は少しは良かったと思う。ダメなスイミーたちが喰い合って、魚合の群っぷりを存分に露呈させたいと思う。

んで、こっから各論ね。

愛国とは何か？

通常の世界生活では、自分たち（組織・家族）の正しさを周囲に認めてもらうには、様々な努力による社会貢献が必要になる。更にその正しさを社会的に維持した生活を営むには、努力の継続も重要だ。これは恋愛の回でやった話ね。

夢は叶ってからが重要で、恋愛でも就職でも（芸能活動でも）、努力を継続できなければ関係が破綻したり（改名したり出家したり）する。

ただ最近のネトウハ▽教育は、この努力をすっ飛ばして、半永久的に自分が正しい状況を作り出すために、愛国を利用してる。

自分たちは常に善で正しく、他者が常に悪（反○・売国奴）で間違っていると決めつければ、努力の必要はない。

その場合、愛国者は自分の嘘がばれて周囲から糾弾されても、悪いのは自分を貶めようとする他者（反○・売国奴）であり、自分は善なる被害者であると言い訳もできる。

言い訳、決めつけ、努力をしない、常に自分だけに都合の良い愛国無罪。

ただ、正しさを神や国家に委ね、教えや法に従って生きる人々も、その多くは厳しい戒律を守ったり、社会貢献の努力をしているはずだと俺は思う。

だから、一山いくらの愛国者も含めて、誰かを否定するためにウマシカを書くつもりは毛頭ない。

最近、「テレビカメラの前で泣くヤツはだいたい悪人」っておぎのコメントがテレビであつたらしいけど、まさにUが言いそうなセリフって思った。すっごくいい意味でね。膝を打つ納得感と、人でなし感が混在する瞬間だね。

でもたぶん、「愛国を語る権力者もだいたい悪人」って同じように言えるだろう。「僕チンの権力構造を維持するために、お前らの命を捧げろ」ってヤツらね。

だから俺はもともと、愛国も反○も売国奴も、自分にだけ都合いい定義がはっきりしてない言葉だから嫌いだ。そういう言葉を使うヤツは信用できない。

そこで、俺なら愛国教育をどういう言葉で語ろうかって考えた。

新しい愛国教育

当たり前だけど、組織とは、社会とは、国とは、つまるところ人の集まりだ。

だから自分も他人も「人」を尊重する教育が、新しい愛国教育の軸になるだろう。様々な人が集まれば、様々なトラブルがある。好き嫌いもある。それはそれとしてありのままを尊重し、関係を維持するための交渉努力を繰り返す教育が、愛「人」教育だ。これを仮にセンテンス・スプリング教育と名付けよう。

けどこれは、あんま新しい話ではないと思う。「結論は当たり前」ってのも、今までの四十一回通して言って来てる。

ただ、他人を尊重することと、先回りして忖度したり自粛することは違う。互いを尊重して高め合うためには、ぶつかり合ってケンカすることも重要だ。

こっちの領海まで侵犯されるのが嫌なら、きっちり抗議して対抗手段を講じ、お互いに納得する線引きのために交渉する。これも集団行動では当たり前の話だ。

やられすぎたらやり返す。自分の痛みを他者に伝える。その繰り返しの交渉努力が新しいセンス教育だと俺は歌う。

実はこれは米の新しい大統領の話でもあるし、アレを一概に差別主義と否定する気はない。今までが逆に行き過ぎていたって話もある。

少なくとも米が世界の警察をやめるなら、これまでのような米の支配力は低下するだろう。今後その空いたスペースに入り込む国と、権力を分け合うことにもなるはずだ。

それが露なのか、中なのか、はたまたこの国なのか。その新しい権力分配がどういった意味を持つのか？

ずっと考えてるし、そういう現実とのつながりが重要だと思ってこれまでウマシカをやってきたけど、こっからはまたちょっと違う方向を目指したいとも考えてる。

ちなみに一個脱線すると、「リトル・ピープル」ってもともとエジソンが言ってたんだね。最近初めて知った。

そもそも才能と努力って実は、「いくら努力しても1%のひらめき（才能）がなければすべて無駄」って、逆に残酷な言葉だったって話だし。そのひらめきを与えてくれるのが「リトル・ピープル」＝地球外生命体で、子供はその声を聴くことができ、人間の運命を動かしているのも「リトル・ピープル」らしい。なかなか面白い考えだし、春樹はここからも着想を得たんだろうと思った。

そういう意味では、今回のネトウハ▽学園騒動もオチによっては、米露中韓北日その他を巻き込んだ一連の新しい世界秩序の流れと連動してるアレかも、とかいろいろ深読みし出すとキリがなくなってくるよ。

② 新しい文学とは

これまでもかなりこだわってしつこく、「いつまでも魂入れ替わってんじゃねえよフィクション！」って中年の主張を世界の片隅でボソボソやってきたつもりだけど、まだやるかフィクション！だよ。

この「イトカワ」にロケットが飛んで戻ってくる時代に、ケータイをいきなり「ガラ（クタ）ケー」ってネガティブな呼び名に変えてスマホに機種変させようとする圧力資本主義時代に（関係ないけど）、入れ替わりやタイムスリップでお茶濁すムリゲー映画に積極的な意味を見いだせない俺だ。

だったらもっと現実とつながってる話で、例えばあの日から6年後の3月11日には、小児甲状腺がんに関する報道はほぼ無視されたとか、公的に小児甲状腺がんの多発は認められたもののそれが何故なのかで御用学者同士が揉めてるとか、さらに御用学者同士が責任を押し付け合ってる会議の不毛さに耐えきれなくて評価部会長が辞表出したとか、そういう話をした方がリアルで切実な意味を持つと思ってきた。

更に現実の世界情勢を考えることも同じようにリアルな意味を持つと思ってきたし、それは今でも変わってない。

でも現実の世界情勢と虚構の文学、実は同じ物語であり、極論すればどっちもフィクションだ。現実の世界情勢が本当のところどうなっているのか、すべてを把握できる存在がいるとすれば、それはもちろん神だけだからだ。

現実の世界情勢は無数の人の意思が関わって動くが、すべての人の意思を把握するのは人間には不可能だから、各国の首脳にだって見えるところまでしか見えない。いわんやウマシカに見えるのは妄想の「竜の島国」ぐらいだ。それはフィクションの域を絶対に出ない。

だったら、それらを超えた新しい文学のキーワードを俺なりに考えた結果、当たり前の結論になった。

「現実とつながっている、読んでよかったと思えるような物語」

そういう意味で今回最も書きたかったのは、『初恋にさようなら』は新しい文学だと俺は思うってことだ。

っていうか、『夏の約束』ってゲイ小説が過去に芥川賞獲ってるけど、むしろ『初恋にさようなら』にあげたいね、俺は。

BLに純文学を持ち込んだ『初恋にさようなら』はたぶん新鮮なんじゃないかと思うし、BLってくくりは気にせず文学好きなら読んどいて損はないよ。読ませる、実に。

少なくともBLだからって理由で埋もれていい作品ではないと思う。俺の中では世間様がもっと気づいて正当に評価すべき作品だと思うね。

あと、「現実とつながっている、読んでよかったと思えるような物語」の新しい出し方を、俺もこれからウマシカなりに考えていきたい。

今回はこんな感じです。長くなった。

どうかな？



考えるウマシカ～第四十二回 『初恋にさようなら』と新しい愛国教育～

<http://p.booklog.jp/book/113835>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113835>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト